**「俄か百姓残日録」**

久保　新一

　住まいのすぐ裏手にある耕作放棄地を借り、俄か百姓を始めて３年になる。ざっと８百坪はあるから、家庭菜園というには広すぎ、第二種兼業農家に相当するかもしれない。初めに屋根に太陽光発電を乗せ、２年目に耕運機を買い、３年目にビニールハウスを建てた。

　蒔き時と収穫期には終日もあるが、普段は早朝の飯前仕事が主で、昼と夕食前に少し働くこともある。農作業は楽とはいえないが、早寝早起・快食快眠で、昔苦しんでいた胃痛、肩こりや腰痛は消え、丈夫になった。

　主作物はジャガイモとエゴマ、豆類である。ジャガイモは昨年５百ｋｇ収穫し、大きめのリンゴ箱２０箱余を必要な人々に分送した。産地北海道が台風被害で不作だったこともあり、喜ばれた。８０坪作付したエゴマは収量３０ｋｇ、全て油にし２百ｍｌ瓶８０本近くになった。中性脂肪・悪玉コレステロールに効くという宣伝効果もあってか、あっという間にはけた。豆類は大豆に黒・青・赤・茶豆に枝豆、花豆と多種。自家製ミソや煮物の他、贈物、交換手段として大活躍である。特に高冷地でしかできない花豆は人気が高い。

　鑑賞用花を兼ねたソバの収量は僅かで、二度のソバパーティで終わる。家庭菜園の常連、トマト・なす・きうり・インゲン・トーモロコシ、各種菜類・根菜類は、必要なだけ作る。余りものは教会に持参して販売し献金する。教会の礼拝は午後二時半から、一仕事終えてからで、ほぼ皆出席である。米は高冷地で不適、下の佐久地域でＩターン農業を営むＹさんの田圃の手伝いと、自家作物の物交で手に入れる。

 高冷地の春は遅く秋は早い。コブシが咲く連休頃一斉に種まきと植え付けを開始、秋は１１月初旬落葉松の黄葉までに収穫を終えなければならない。月に一度は横浜を訪れるが、自然と足は終列車に向かう。

　穫り入れ後も、上さん主役で豆類やエゴマの選別・処理の夜なべ仕事が年明けまで続く。落葉を集めた堆肥作りもこの季節の仕事である。落葉、稲わら、生ごみ、牛糞、有機石灰、米ぬか、くず野菜等を幾重にも重ね積み込む堆肥作りは、結構な重労働であると同時に有機野菜作りには欠かすことの出来ない大事でもある。雪が来る前に終え、途中で１回切り返し１年半寝かせて翌々春畑に蒔く。

　Ｉターン組、地元定年退職組を含め畑友が増えた。夕食後、中高年百姓連が福祉施設に集い、マットストレッチでのたうち廻り湯船で情報を交換する。時には元Ｎ響メンバーのホームコンサートやソバ会食会という楽しみもある。貧乏で不治の病をかかえた老引退牧師が、俄か百姓仲間の健やかな精神的リーダー役を務めていてくれることも、確かな活力源になっている。

　早朝、農作業の手を休め、冷気に身をひたして山を仰ぎ、新緑に囲まれ小鳥のさえずる声に耳を澄ましていると、しょせん人間は自然の一点景にすぎないことを痛感する。

　宗教改革５百年、科学・技術と機械・都市文明を育んだ近代は、いたるところできしみ音を響かせ始めている。人間は自然の一部であることを自覚して生きる時代の到来を祈るばかりである。